

主 題：交渉の余地なし 3
 聖書箇所：申命記 10章12-13節

ご存じのように、私の家庭は国際結婚ですからこの家庭に生まれて来る子どもには興味深い事実があります。我が家の子どもたちは日系アメリカ人かアメリカ系日本人か、どちらなのか？ということが起こります。子どもたちはどのように自分自身を見るのか、また、皆さんもどのように彼らのことを見るのかによって、彼らは日系アメリカ人だからと言うのか、または、アメリカ系の日本人だからと言うのかが変わって来るのです。それはそれですばらしいことなのですが、家の中では時々複雑な状況が起こります。例えば、今年の夏、北京でオリンピックがあります。どこの国を応援するのかで混乱が起こります。ある時は日本を応援したいしある時にはアメリカを応援したい、どちらも彼らには母国だからです。どちらの国を、どちらのチームを応援するのかを彼らが選択するのは難しいことです。なぜなら、私は日本を応援するし妻はアメリカを応援するからです。どちらのチームも決勝に進んだ場合、また、直接対決などが起こった場合、とても複雑な状況が起こります。彼らの中にはどちらの方を応援するのかということにおいて、何らかの決まりがあるように見受けられます。それは、もし片親だけなら多分その親が応援するほうを応援するでしょう、つまり、私が見ている傍にいるなら私の応援に従うでしょう、また、何か国かの選手の決勝となると多分金メダルを取りそうな選手を応援するでしょう。私たちは自分の好みの方、親しみを覚えている方を、強い方を、私たちが愛する人が属している方を応援しようと思います。実は、私たちも同じ問題を抱えています。なぜなら、皆さんも二重国籍をもっているからです。私たちも同じように、どちらの国を応援するのか、どちらの国に加担して生きて行こうとするのかという、その選択を毎日の生活のあらゆる瞬間に求められているのです。皆さんのほとんどは日本人です。けれども、私たちはどのような日本人なのかを考えなければいけません。なぜなら、私たちの国籍は天だからです。それゆえに、私たちはクリスチャンである日本人として自分を見るのか、日本人のクリスチャンと考えるのか、その選択を様々なところで迫られているのです。私たちはどちらを重要視するでしょう？私は日本人ですと言うのか、私はクリスチャンですと言うのか、また、私は地上に生きる者ですと言うのか、私は天の御国の中で生きる者ですと言うのか、その違いが私たちにあるのです。私たちも地上と天の二重国籍をもっているのです。その中で私たちも選択をします。どちらを応援するのか、どちらに協力するのか、どちらの方を向いて一生懸命生きて行こうとするのか…。子どもたちが日本を応援するのかアメリカを応援するのかは笑い事で済みますが、私たちが地上の国籍を取るのか天の国籍を取るのかというのは、笑い事では済まされないことです。

私たちはこれまで申命記10章のモーセのことばを通して、神が私たちに要求している五つの事柄を見てきました。これまで、最初の三つの私たちが交渉することができないこと、神が圧倒的な形でそれをしなければならぬと私たちに求めている事柄を見て来ました。今日は、その四番目を考えて行こうと思います。そして、この四番目の事柄が、私たちがこの地上においてどちらの国籍を優先し、どちらのチームに属し、どちらのために生きて行くべきなのかを明確にしてくれるものです。これまでも話したように、この五つの要求は非常に単純なものです。分かりやすい複雑でない事柄です。私たちがこれらを学ぶことを通して、私たちははっきりと神がご自身の民に求めていることが何かを知ります。私たちの目標はそれを知ることではありません。それを暗証して繰り返すことでもありません。実践すること、それが私たちの目標です。なぜなら、私たちは自分のことを「神の民だ」と呼ぶからです。ですから、そのことをしっかり理解した上で、この箇所を細かく学んで行きましょう。

モーセは申命記10：12-13でこのように言いました。「イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。それは、ただ、あなたの神、主を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕え、：13 あなたのしあわせのために、私が、きょう、あなたに命じる主の命令と主のおきてとを守ることである。」、モーセは最初に私たちに問い掛けました。「今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か」と、モーセはその質問に対して明確な解答を私たちに与えてくれたのです。非常に単純な五つの要求が記されていました。

☆神が私たちに求めておられること

1. 神を恐れる

私たちが神がだれであるかを正しく知るとき、私たちは健全な神に対する恐れをもつようになるということを学びました。そして、その恐れこそが神が私たちがもつべきだと言われることだったのでした。

2. 神に従う

「**主のすべての道に歩み**」なさい、私たちの人生の方向がどこに向かっているのかということでした。私たちは神が私たちに求めることを神のみこころに沿って行なって行こうとして生きているのか、そうでないかを問われたのです。神は「あらゆる分野においてわたしが示す道をあなたは歩まなければならない」と言われました。

3. 主を愛する

これは五つの中の頂点と言っても過言でないと言いました。神を愛する、完全に心から神だけを愛して行く、その愛を神は私たちに求めておられる、そのことを見て来たのです。

これまで何度も話して来たように、これらの事柄はイスラエルの民にここで語られていることですが、ここで求められている五つの要求は、イスラエルの民だけに限定されているものではなく、すべて、神の民と自らを呼ぶ者に対して求められていることです。それゆえに、私たちが見てきたこれらの事柄はすべて私たちに直接的に適用することです。

4. 神に仕える

このことはいったいどこから湧き上がって来るのか、どうすれば私たちはこのような「仕える」ということを行なって行けるようになるのかということ、それはこれまで上げた三つの事柄に深い関係があるのです。ですから、先にこの関係について考えたいと思います。

◎「仕える」ということばと神の三つの要求との関係

(1) 主に対する「恐れ」は主に「仕える」ことを生み出す

私たちは神から「仕えなさい」と言われました。なぜ、そのことを神が求めているのか、非常に論理的です。一番目の理由は、神を恐れるなら私たちは神に仕えるようになるということです。神への恐れは私たちに神に対する奉仕、仕えることを生み出して行きます。このことばをはっきり理解するために私たちに必要なことは、ここで使われていることばがどのような意味をもっていて、そのことばが旧約聖書の中でどのように使われているのかを見ればいいでしょう。ヘブル語の辞書を見ると、このことばは比較的広い意味をもっていますが、その意味のほとんどは「何かを行なう」という意味です。「仕える」ことも行なうこと、そして、何か実践をして行く、そのような意味でも使われることばです。目的を果たすと。けれども、このことばがときに神学的な意味合いをもって使われることがあります。このことばが「神」ということばと一しょに使われるときに、特に、神の礼拝に関する事柄の中で使われます。事実、このことばは旧約聖書の中で56回「ヤーウェー」ということばと一しょに使われていて、そのときの意味は「礼拝する」という意味です。つまり、ここで神が私たちに求めていることは、主を礼拝すること、礼拝の行為、礼拝のために行なう様々な奉仕、それらすべてがここに含まれます。事実、このことばは実に偶像に対しても使われます。偽りの神々に対しても使われるので、その比較は明らかです。神に仕えるのか、偶像に仕えるのかということで、礼拝するときあなたはどこに目を向けていますか？ということ。それゆえに、私たちが神がだれであるかを正しく理解するなら、この神だけを礼拝しなければいけないことが分かります。神を正しく恐れる、その正しい知識を私たちが身に付けるなら、神が神であるゆえに、私たちはこの神に仕えるようになるのです。神が圧倒的な創造主であり、絶対的な主権者であることを正しく理解するなら、私たちが唯一できることは、その方の前にひざまずいてその方を称えることだけです。それゆえに、私たちが神からこのような要求を受けることは当然なのです。私たちは主を恐れる者だからです。それゆえ、神の民は主に仕えるのです。

(2) 「神に従う」ことにも関連する

「**主のすべての道に歩み**」と言いますが、余りにも明らかなことなので説明を加えることもないのですが、もし、皆さんが神が求めている道を歩んでいるとするなら、それは神に仕えていることです。なぜなら、聖書から教えられるように、神はすべてのものをご自身の栄光のために造られ、私たちが神が救ったのは私たちが神の栄光を称えるためだったから、私たちが主のすべての道を具体的に歩んでいるなら、私たちが行なっていることは神を礼拝することであり、神に仕えることであるはずだからです。私たちが主に従おうとするから、神はそのことを要求されるのです。

(3) 神を愛することが神への奉仕、礼拝を生み出す

神が私たちに神の民に求めるその愛は、単なる感情的なもの、口先だけのものではありませんでした。私は神を愛するゆえに、どんなときにも神の前に最高のものをささげ、最善のことを為して行くというその決意に基づいた愛でした。それゆえに、この愛は告白だけの愛ではなく実践の伴う愛だったのです。

「私は神を愛します」という愛は、神の命令を守るという具体的な行為において現わされるものであり、神が求めていることを何でも喜んで実践して行きたいという、そのような態度に基づいた様々な具体的な行為に現われるものです。事実、神のために私たちが何かをするのは、私たちが神を愛しているからです。神が求めている行為はそのような行為です。やりたくないけれどもしょうがないからいややするものではありません。愛しているからこそ私たちは喜んでやろうとするのです。

神に仕えて行く、神を礼拝する、その行為の最大の動機、それは私たちが神を愛するからです。内側にそのような愛をもっているゆえに、私たちは行動の中で神を礼拝し神に仕えることを為して行くのです。それゆえに、私たちが自分たちの生涯に心からの神への礼拝と、喜びに満ちた神に対する奉仕を見ることができれば、私たちは確かに神を愛していると結論付けることができるのです。もし、私たちがそのようなしていないなら、それは私たちのうちに神への愛が欠落していることを教えます。イエスは山上の説教の中でこのように言われました。マタイ6：24「**だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。**」と、「**ふたりの主人に仕えることはできません**」、一方を愛し一方を憎むからです。奉仕と献身と礼拝に置き換えてもいいでしょう。心から愛しているならその愛している方への奉仕が生まれて来るのです。神は私たちに礼拝しなさい、神に仕えなさいと求めておられます。このことははっきりイスラエルの民の前に示されました。十戒の最初の二戒、申命記5章でモーセはそのことを繰り返すのですが、その最初の二つはこうでした。5：6－10「**わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。：7 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。：8 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。：9 それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、：10 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。、**「**わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。**」ということと、「**自分のために、偶像を造ってはならない。…それらを拜んではならない。**」ということでした。神だけを礼拝しなさいと言っているのです。私たちは排他的な礼拝を神にささげなければいけないのです。皆さんの人生の中に神以外の礼拝の対象、奉仕の対象があっては行けないと、神は要求しておられ、そして、それこそがまさに神がここで私たちに求めている要求なのです。

確かに、旧約聖書はそのことを教えています。新約聖書はどうでしょう？イスラエルの民に十戒が与えられました。私たちには関係ないと言いたいかもしれませんが、それは言えません。なぜなら、新約聖書も同じように私たちに神だけに仕えなさいと教えるからです。たとえば、コロサイ3：24「**あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。**」、ピリピ3：3「**神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。**」、Iテサロニケ1：9「**私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、**」を見たとき、クリスチャンが神に仕える者になったということが記されています。パウロはテサロニケのクリスチャンたちに対して、あなたがたはこれまで仕えていた偶像から立ち返って唯一真の神にのみ仕える者になった、これがクリスチャンだと言っています。また、パウロは自分自身を説明するにあたってそのことを告げます。たとえば、ローマ1：9「**私が御子の福音を宣べ伝えつつ霊をもって仕えている神があかしてくださることで、私はあなたがたのことを思わぬ時はなく、**」と、パウロは神に仕えていました。同じことが使徒の働き27：23に記されています。「**昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、**」と、パウロは明らかに神の民として神に仕えていたのです。なぜなら、それが神が神の民すべてに求めることだからです。ヘブル9：14を見てください。ここにはこのことが最もはっきり書かれていると思います。「**まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするのでしょう。**」と、救われた人たちは神に仕える者だと言っています。イエスが言われたように、二人の主人に仕えることはできないのです。この世に仕えつつ神に仕えることができないゆえに、私たちは神の民になったゆえに神にのみ仕える者になったのです。私たちは神だけに全身全霊を傾けて仕えなければいけないのです。

モーセはそのことをこの「主に仕える」ということばに二つの表現を加えることによって表わしました。申命記10：12をもう一度見てください。「**…主を愛し、心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕え、**」、「**心を尽くし、**」「**精神を尽くして**」と、簡潔に言うなら、先ほども言ったように「全身全霊をもって」ということです。私たちのすべてが外側も内側もあらゆる部分が神に仕えるのだと、残されている部分はどこにもない、神に仕えない部分はどこにもないと、それが神が私たちに求める仕え方なのです。私たちが完全に神に仕えて行く、心から神を礼拝する、積極的に犠牲的に神に私たちのすべてをささげ続ける、それこそがまさに神に対する礼拝なのです。イエスがこのような話をされています。ルカ9：59－62「**イエスは別のの人に、こう言われた。「わたしについて来なさい。」しかしその人は言った。「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」：60 すると彼に言われた。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」：61 別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」：62 するとイエスは彼に言われた。「だ**

れでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」、イエスはここで、決して、自分たちの家族、それが生きていてももう亡くなっているでもその人たちに失礼なことをしなさいとか、その人たちに憐れみや愛情をもってはいけないと言っているのではなく、強調していることは、いったいどんな人物が神に御国にふさわしいのか、キリストの弟子にふさわしいのかということです。ここでポイントになっていることは、あなたは何を一番優先しますか、あなたはどこを向いて生きていますかということです。これまでのところにもイエスが言い続けてきたことは、わたしを愛しなさい、神を愛しなさいということです。イエスはよくそのような話をされました。すべてを捨ててわたしに従いなさい、わたしだけを愛しなさい、他のものを愛してはいけませんと、これは排他的な関係だったのです。それゆえに、その決心をしたのなら他のことすべてを横に置いてわたしのために生きなければならぬということを強調しているのです。そのことをもっとも顕著に表わすのが、62節で言われていることです。「**だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。**」、皆さんどうぞ想像してください。皆さんは農夫です。前に動物がいて右手は手綱を持ち、左手に鋤を握っています、畑を耕しているとして農夫は真っ直ぐ前を見ていなければいけません。そうでなければ進む方向が曲がって畑は使えません。もし、あなたが「私は神を愛する、神に仕える」と言って神の民となる決心をしたなら、あなたは手を鋤につけているのだから、うしろを振り返ったり、横を見てはいけなと、イエスはそのように言われるのです。真っ直ぐ前を見て、神だけを見て、神だけに仕えることをして行かなければいけない、そうでなければ、神の国にふさわしくないと言います。イエスが言われるのは絶対的な献身、排他的な礼拝です。神が要求されることは、わたしに「**心を尽くし、精神を尽くして**」仕えなさいということです。

私たち人間は根本的にいくつかの大きな問題を抱えています。そのひとつは、私たちが神を知っているながら神を神としないことです。ローマ1章にそのことが記されていますが、神がないということを私たちが信じていることが問題ではありません。私たちはみな、神がいることを知っています。被造物を通して神はそのことをすべての人に証しておられます。この地上に存在するすべての人は、神が確かにいるということを知っています。問題は、その神に対する知識を私たちが心の奥底にしまい込んで、それにいっさい目を向けず、その代わりに、自分に都合の良い神に仕えることを選択していることです。私たち人間は真の神に仕えることをするのではなく、都合よく自分の願いをかなえてくれる神を神と呼ぶことに長けているのです。だから、好き勝手にいろいろな神を称え、都合の良いときに都合の良い神のところにお参りに行くのです。その要求は聖書の神が求めているほど絶対的、圧倒的な献身でなく、まあ年に3回位わたしのところに来なさいというものなら、喜んで仕えるかもしれません。そのようにして偶像を信仰したり、または、自分に喜びを与える様々なものを礼拝の対象にするかもしれません。真の喜びと満足を与えてくださる神ではなく、自分が求めている利己的な渴望を満たすために、たとえば、金銭や人間関係や地位や名声や、様々な物欲を神としているのかもしれません。私の知っているある方は「私の神はお酒です」と言います。その人にとって自分の心を満たすことができる方法はお酒だったのです。それが私たち人間なのです。また、多くの場合、私たちは自分自身を神として立てています。自分が絶対者なのです。だから、自分が求めているように自分が生きて行くことを願い、そうならないと苛立ち憤りを覚え、そうなる喜びを覚えるのです。自分自身に仕え自分自身を礼拝し、自分のために生きて行こうとするのです。それが私たち人間のもっている根本的な問題です。幸いなことに、クリスチャンはその問題を解決しました。それが間違っていると悔い改め、テサロニケの信者たちのように、それまで仕えていた偶像から立ち返って真の神に仕える者になったのです。ただ、残念なことに、私たちにはまだ問題があります。私はこのような表現をするのですが、私たちには霊的三日酔いが起こるのです。もう、以前のことはしないのですが、まだ、その影響が余りにも強いゆえに、今朝起きてもまだ頭がガンガンしているのです。古い自分がまだ残っているのです。それゆえに、私たちはこの葛藤、古い自分の与える影響との葛藤を覚えて生きているのです。それゆえに、それが強くなってきたときに私たちは手を鋤につけていながら前見ないで後ろを振り返るのです。そういえば、あれは私にあのような喜びを与えてくれたと。後ろを見た瞬間、皆さんが進んでいる方向は大きく逸れて行きます。それが私たちが毎日生活して行く中で抱える大きな問題なのです。私たちがこの地上において見つけることができる様々な喜びに目を向け、世的な喜びに心を傾け、神に熱心に礼拝をささげ神だけに仕えることを横に追いやろうとする傾向を私たちはいまだにもっているのです。

パウロはその解決方法として私たちにこのようなことを教えました。私たちが自分の心を一新しなさいと言いました。ローマ12:2にあります。「**この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一変によって自分を変えなさい。**」、もう、私たちの心は新しいものに変えられているのです。古い影響がいまだに残り続けるゆえに、そこには様々なチャレンジが起こって来ます。それゆえに、私たちは常に心

を新しくし続けて行くのです。神のことに目を向け、神に仕えることに喜びを見出すために私たちは心を変え続けて行かなければいけないのです。神に喜ばれる者へと、より成長を遂げたクリスチャンへと変わって行かなければいけないのです。神のみこころが何であるのかをしっかりと知り、何が良く、何が正しく、何が神に喜ばれるのかをしっかりと見極めて、それを実践して行くことができるように、私たちは思いを変え続けて行かなければいけないのです。パウロはエペソ2：22-24で「**その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、：23 またあなたがたが心の霊において新しくされ、：24 真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。**」と教えています。「心の霊において新しくされ」なさいと、あなたがたはこれまで神に喜ばれない古い人を着ていましたが、それを今脱ぎ捨てて心を新しくして新しい人を身につけ続けなさいと言うのです。私たちは今このプロセスの中にいるのです。このことを為し続けて行かなければいけないのです。そうしなければ私たちは手に鋤をもって後ろを振り返ってしまうのです。イエスは言われました。そのように後ろを振り返る者は神の国にふさわしくないと。

どうでしょう、皆さんはこのような排他的な礼拝をささげておられますか？神以外に私は仕えるものは何もないという生き方を生きていますか？皆さんは今日、礼拝に来るのが楽しみだったでしょうか？早くここに来たかったですでしょうか？皆さんは神に仕えることに心から喜びを感じていますか？どのようなことでもいいから私にできる奉仕を与えてくださいと、そのような思いをもって皆さんは教会で奉仕されていますか？もう少し早く救われていたら良かった、今以上に神に仕えることができたのにと悔いることがありますか？それとも、皆さんは教会に来る足が重いことに気づいておられますか？皆さんは神を礼拝するに当たって、神に仕えるに当たって、ああまたこれをしなければいけないのかと思っていませんか？皆さんはもう10年、20年後で救われたらよかった、そうすれば世の中の楽しいことを存分に体験してから救われることができたのにと、そのように思っておられませんか？皆さんはどちらですか？それが今日、皆さんに神が問われていることです。

◎どうすれば、このような献身に満ちた絶対的な礼拝をささげる者になるでしょう？

これが一番大切なことです。どうすればできるでしょう？もうすでに、皆さんにお伝えしたことです。が、敢えて、もう一度言わせてください。二つのことを皆さんにお伝えします。

(1) 神がだれであるかを正しく理解する

「主を恐れる」ということ、神がだれであるのかを正しく理解したときに私たちは神に仕えずにはおられなくなります。1列王記18章に出てくる話、皆さんはよくご存じでしょう。エリヤとバアルの祭司たちのことです。この当時、イスラエルの人たちは間違った生涯を送っていました。イスラエルの女王であったイゼベルという悪い女性の影響のもとに全イスラエルはバアル崇拝へと進んで行ったのです。そのような状況の中で、エリヤはイスラエルの民に対してこのようなチャレンジを与えます。彼は民にこのように言います。18：21「**あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。**」と、イスラエルの民はバアルを信奉していたのですが、まだ、イスラエルの神に対する思いも少しは残っていたのでしょうか。だから、どちらですか、はっきりさせなさいと言ったのです。そして、カルメル山に人を集めてそこで戦いをし、どちらの神が本当の神か証明し合おうと言うのです。カルメル山にバアルの祭司たちを450人集めて、エリヤ対450人の戦いが始まるのです。祭壇を作りそこにいけにえを乗せてたきぎを組んで、天から火をつけた神が本当の神だとしました。エリヤは先にあなたがたから始めなさいとバアルの祭司たちに言います。祭司たちは一生懸命祈りいろいろのことをしましたが何も起こりません。エリヤが出て来て水をいけにえにかけ、祭壇の下に溝を掘ってそこにも水を貯めるのです。つまり、火が付くなど考えられない状況を作った後で、神に対してこのように祈ります。36-37節「**アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があるのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行なったということが、きょう、明らかになりますように。：37 私に答えてください。主よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してください。ことを知るようになしてください。**」、つまり、エリヤは神が神であることがはっきり証明されますようにと求めるのです。そして、その直後、天からの火がこのささげものを焼き尽くすのです。それを見たイスラエルの民は39節「**民はみな、これを見て、ひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です。」と言った。**」、神がだれであるのかを示してくださいとエリヤが祈って、神が実際にそれを示してくださいときイスラエルの民がしたことは礼拝です。彼らの心はそれまでバアルに向いていたのです。けれども、あなたこそが真の神だと分かったから私はあなたを礼拝しますと、そして、エリヤは民にバアルの祭司たちを捕らえなさいと言います。すると、人々は従順に従って彼らを捕らえるのです。40節「**：40 そこでエリヤは彼らに命じた。「バアルの預言者たちを捕えよ。ひとりものがすな。」彼らがバアルの預言者たちを捕えると、エリヤは彼らをキシオン川に連れて下り、そこで彼らを殺した。**」、神に対する礼拝、神に対する完全な献身と奉仕、そ

れは私たちが神が神であることをしっかり理解したときに、初めて起こって来ることです。もし、皆さんが私はそのような礼拝をしていません、そのように神に仕えていないと言われるなら、皆さんもう一度神を見てください。そして、神はどんな方なのかをよく覚えてください。

(2) 神が私たちのために何をしてくださったかを知る

パウロはピリピ人への手紙3章で自分自身の生涯を証しています。3：4－11「ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。：5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、：6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。：7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。：8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとおと思っています。それは、私には、キリストを得、また、：9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。：10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、：11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」、なぜ、パウロはこの地上のあらゆること事柄を「ちりあくと」言えたのでしょうか？それは神が彼の人生の上にどのようなすばらしいことを為してくださったのかということ、彼がはっきり理解していたからです。キリストを知り、キリストを知ることができるように変えられ、キリストに似た者へと変わって行くその希望、その現実が与えられたとき、パウロは私にとってそれ以上に価値のあるものはありませんと言ったのです。パウロは後ろを振り返ったのでしょうか？振り返っていません。なぜなら、パウロは前にあるものがどれほどすばらしいのかをよく理解していたからです。彼は後ろしか見ていなかった今までの人生から変えられて、前を見ることができるようになったそのすばらしい恵みがいかに尊いものであるのかがよく分かっていたからです。

パウロに関して、私が非常に驚くことがあります。使徒の働き14章に記されていることです。彼の第一次宣教旅行中にバルナバといっしょに様々な町を回りますが、先ず初めに、アンテオケで働きをします。そのときユダヤ人たちが怒ってパウロを殺そうとします。それゆえ、パウロは次の町イコニウムへと旅立って行きます。そこでも同じことをしました、ユダヤ人たちは怒って彼を石打ちにしようとし、それを知ってパウロはそこを出てルステラへ行きます。どれも大体100キロ位の距離です。ルステラで働きをしていたとき、アンテオケとイコニウムから憤ったユダヤ人たちが集まってルステラにやって来るのです。このようなことばが記されています。「ところが、アンテオケとイコニウムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。」(使徒14：19)。パウロはここで奇蹟的に癒されるのですが、その後、パウロはまだそのユダヤ人たちや群衆がいるルステラの町へ戻るのです。そして、その後デルベという町に行くのですが、そこで働きをした後にどのような経路を辿るのか、パウロはデルベを出てルステラに戻ります。そして、そこからイコニウム、アンテオケへと行きます。聖書はこのように記しています。14：21－22「彼らはその町で福音を宣べ、多くの人を弟子としてから、ルステラとイコニウムとアンテオケとに引き返して、：22 弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国にはいるには、多くの苦しみを経なければならぬ。」と言った。」と、皆さんはどうでしょう？ルステラに戻りますか？イコニウムやアンテオケに行きますか？自分を憎み殺すことを喜びとしていた人々がそこにいるのです。パウロは分かっていたのです。私は神に仕えることが最もすばらしいことだ、自分のいのちを守ることではないと。パウロはキリストが彼に求めたことを他の何にも増して絶対にして行こうという決意をもっていたのです。

サムエルはこのように言いました。「ただ、主を恐れ、心を尽くし、誠意をもって主に仕えなさい。主がどれほど偉大なことをあなたがたになさったかを見分けなさい。」(Iサムエル12：24)。神は皆さんにすばらしい働きをされました。神は皆さんを救いのちを与え、そのいのちを用いて神のために証をするというすばらしい働きを与えてくださいました。それを思うとき、そして、救ってくださった偉大な神がだれであるのかをはっきり理解するとき、私たちにできることはただ一つです。この方だけを礼拝しこの方だけに仕えて行くことです。

神の側に立ってください。皆さんが応援するべき方は神です。皆さんが仕えるべき方は神です。皆さんが忠誠を誓い礼拝するのは神だけです。願わくは、皆さんがそのような生き方をして、いつの日か神の前に立ったときに、そのように「心を尽くし、精神を尽くして」主に仕えたゆえに、神が「よくやった。忠実なしもべだ。」と呼ばれるような者へと変わって行きましょう。